

前途明るいイカ漁

津奈木 漁民 対馬海域でそう業



水俣 病の 影響 森 氏 金 場を 失つ

た津北郡津奈木村では不知火海での操業にみきりをつけ、対馬海域への近海漁業に活路を見出すためさる八日第一陣として四隻の船団が出漁、対馬近海でイカ漁に従事しているが、この船団のリーダーとして同行した県水試生深分場の金森清爾門技師が二十日午後帰郷、水俣市中央街衣屋二階で「イカ漁は十分採算がとれ前途は非常に明るい」と現地のようをつぎのように語った。

現地では連結式イカつり漁という漁法をやっているが、これは労力をあまり必要としないのが特色で、シーズンは十二月中旬

から来年二月までの約三カ月間、こんどの出漁では寒イカをとるのが目的だったが、シーズン前なのでおもに秋イカと寒イカの間のおとうイカをとった。同村漁民はちようと月夜であつたため漁がなく現在三回しか操業していないが、一人平均一八・七五から二六・二五(三百七十五ポンド)の二七円の水揚げがあり、シーズンに入れば三カ月で大体三十万円の收穫の見通しだ。現地漁民のうちには二人乗りの船で一シーズン最高八十万円の水揚げ、一人一晩平均七千尾のイカをとっている。この漁法は特別の技術もいらず、また不知火海漁民部落に多いウタセ網船でも十分操業できるのが強味だ。現地は昔から北海道などからも沢山の漁師がやってきており排他的なところ

は少しもなく、自分たちもイカを加工する場合など自家製造だけではたつてゆかないのでむしろ歓迎する傾向が強く水俣村の漁民であることを聞いて非常に同情し便宜をはかつてくれた漁民たちもこれなら、もう津奈木には帰らなくてもよいというほどで、将来の見通しは非常に明るい。またみんな心配しているのは李フイン問題だが、同漁場は同フインのずっと東側にあり心配はない。

また同席した津奈木村松原助役と鎮山村議は金森氏の報告について「村としては、この機会に政府に対し出漁の融資について強力に働きかけ、第二陣の出漁に努力したい。またさしあたり現地にバラックを建て基地の拡充をはかり将来に備えたい」とこどもも語った。